

contents

ダイバーシティセミナー採録

子育て世代への応援は企業にとって、どんな価値があるのか
赤ちゃん～ゆりかごのなかの科学者～

お茶の水女子大学副学長
榎原洋一先生

男女平等の国フィンランドの子育て、家族、仕事……
家族まるごと「ネウボラ」に支えられ、
社会に祝福されて子どもは生まれてきます

フィンランド大使館報道・文化担当参事官
ミッコ・コイヴマー氏+エリサさん

ダイバーシティセミナー採録

子育て世代への応援は企業にとって、どんな価値があるのか
赤ちゃん～ゆりかごのなかの科学者～

2015年6月2日開催



お茶の水女子大学副学長
榎原洋一先生

何を支援すべきか知るために、 赤ちゃんという存在を正しく知ってください

企業にとっての子育て支援を考える場合、「子育て」の
とらえかたで支援の仕方や方向性が変わってくると思
います。特に乳幼児期は、親の気持ちのなかでも、仕事と
子育てをどう両立させていくかは大きな課題です。

それは女性(母親)にとって大きな悩みになっている現
状がありますが、その原因は「子育ては母親がすべきも
の(母性神話)」「3歳までは母親の手で(3歳児神話)」と
いう根強い考えを捨てきれない社会があるからです。

はたして本当に、赤ちゃんは母親が育てなければその
後の成長に問題が出てくるのか。赤ちゃんが健やかに育
つ環境として何が大切なのか。企業で人事に携わる方た
ちには、そもそも赤ちゃんとはどういうものなのかを正
しく知っていただくことが重要だと思います。

私は小児科医ですが、私よりさらに一世代上の小児科
医、特に男性の小児科医には、きわめて父権主義的な人
が多くいました。あるとき小児科学会の重鎮であった方
が、「子どもが病気のときぐらい、誰かに仕事は替わって

もらって、お母さんがそばについてあげましょう」
と言いました。私はこの発言には2つの大きな問題があ
ると思います。ひとつは、「病気のときにそばにいるのは
母親であるべきだ」ということの根拠はどこにあるのか。
そしてもうひとつは、男性は子どもの病気「ぐらいい」仕
事を休むわけにはいかないが、女性の仕事「ぐらいい」誰
にでも替わってもらえるという意識が表れている考え方
だということです。

今も根強く続いているこうした考えには、まったく根
拠のないウソも含まれているということを、まずは知っ
ておいていただきたいと思います。

赤ちゃんは周りの影響にとっても敏感です

では赤ちゃんとは、どんな存在でしょうか。

ここでひとつアメリカの研究を紹介します。長期間虐
待が続いた子どもたちの追跡調査の結果です。「身体的虐
待を受けた子ども」と「ネグレクトを受けた子ども」を、
それぞれ「2歳より前に虐待を受けた子ども」「2歳以降
に受けた子ども」に分け、思春期以降にどのような情緒
的社会的問題が起きるかを調査しました。その結果、2

歳前にネグレクトを受けた子どもにその後の影響が最も大きいということがわかりました。

まだ記憶に残らない2歳前までに親に放っておかれたことの影響が、身体的な虐待よりも、2歳以降の虐待よりも問題が大きいのです。乳幼児期がいかに周りの環境に敏感であるかを示す結果だといえるでしょう。

乳幼児期というのは、まさに子育ての真骨頂の時期です。赤ちゃんにとっても、一生のなかで一番変化が大きい時期です。生後1年で体重が3倍になり、身長が25センチ伸び、立って歩くようになり、ことばを覚えます。ですから栄養も大事、赤ちゃんにかかわる周囲の環境も非常に大事です。この時期の赤ちゃんの発達にはドラマチックで、それを一つひとつ見守りながら育てていくのが乳幼児期なのです。

だからといって、「お母さんは仕事をやめて子育てに集中するべき」というのはナンセンスです。それはなぜかということ、これからお話していこうと思います。

赤ちゃんは、何もできない存在ではありません 自ら育つ能力をたくさん備えて生まれてきます

赤ちゃんのイメージとして、「まだ何も書き込まれていない真っ白な板のような状態で、これから経験によってひとつずつできるようになっていく」というものがあります。だから「育て方によって、すべて決まってしまう」と、昔は思われていました。しかし現在では、赤ちゃんにはもともと自律的に育っていく力、自ら学び取っていく力が備わっていることがわかってきました。



赤ちゃんの発達には原則があり、首がすわって手が使えるようになる、寝返りができ、おすわりをして、立って歩く……という順番が決まっています。しかも、運動発達に限っては、ほぼ放っておいてもやるべきときにはできるようになります。赤ちゃんのなかに、もともと組み込まれている運動発達プログラムがあり、それに従って赤ちゃん自身の力でできるようになるのです。

赤ちゃんには、周りの情報を積極的に取り入れて学び取っていくしくみも備わっています。

そのなかで有名なのが「新生児模倣」です。生後1か月ぐらいの新生児の前で、いろいろな顔の表情をすると新生児はそれを真似ます。生まれてから1～2か月の赤ちゃんは、まだ自分の顔を見たことがなく、目の前に見えるものが自分にもついていることを知りません。にもかかわらず、赤ちゃんの前で舌を出したら舌を出すのです。

最近の脳科学でわかったのは、私たちの脳のなかにミラーニューロンという神経の一群があって、他人の行動を見ると自分がやったような気になる、あるいはそれを真似するというしくみがあるということです。こうした能力が生まれたばかりの赤ちゃんにもすでに備わっていて、周りの環境を自分から取り入れていくのです。

物事の因果関係についても、わずか4か月の赤ちゃんが理解していることを証明する実験があります。赤ちゃんの足とモビールをひもでつなぎ、足を動かすとモビールが動くようにすると、すぐにその関係性がわかり、さかんに足を動かしてモビールを動かします

対人関係を作っていく力も備わっています。赤ちゃんは人の顔を一生懸命見えています。「アイトラッキング装置」を使って計測してみると、人の目元口元をもっともよく見ていました。また、スチルフェースの実験というものもあり、いっしょに遊んでいた親が急に顔の表情を止めると、子どもは驚いて、顔を触りに来たり泣き出したりして、相手の反応を引き出そうとします。

人の顔を見ることから、人の視線の先にあるものを見る「三項関係」も自然にできるようになります。そして、自分が見ているものを指さし、それを相手が見ているかを確認し、同じものを見て思いを共有する「共同注意」と

いう社会性も1歳すぎには身につけていきます。

このように、赤ちゃんにはたくさんの能力が備わっていて、自律的に育っていく力をもっています。周りに対して敏感で、一生懸命人の顔を見て対人関係を作っていくとする面と、脳に組み込まれている発達プログラムに従って自分で育っていく面。その両面性をもっているのが赤ちゃんです。

赤ちゃんによい環境はお母さんだけでなくお父さんや保育士にもつくれます

では、赤ちゃんが育っていくのに必要な環境はどのようなものでしょうか。アメリカのNICHD (National Institute of Child Health and Human Development)が、保育園に預けるのと実の母親が育てるのでどう違うかという違いが出るかを15年かけて調査して「母親と保育園のどちらがよく育つかの差は出ない」という結論を出しました。唯一差が出る項目は、母親か保育士かの差ではなく、子どもを保育する人の感受性の差、「子どもが出しているサインをよむ能力がある人が育てるとうまくいく」というものでした。生物学的な母親が育てなければいけないということではないと、15年もの追跡調査によってはっきりわかったのです。

赤ちゃんに対する感受性をもった人が育てれば、赤ちゃんはそれに反応するだけの能力を持っています。きちんとした保育園に預ければ、母親が赤ちゃんとずっといっしょにいても、心配しなくてよいということです。

では父親はどうでしょう。赤ちゃんに話しかけるときに自然に声のピッチが高くなることを「マザリーズ」、赤ちゃんの泣き声に反応して射乳反射を起こすホルモン(オキシトシン)を「母性ホルモン」と呼ぶように、母親のほうが子育てに向いていて、父親は太刀打ちできないと思わされてしまうことが多いですが、これも思い込みです。

まず、「マザリーズ」は女性だけでなく男性もできているということが、世界中の母親父親の声のピッチを測った実験で明らかになっています。だから専門家は「マザリーズ」ということばを使わなくなっています。さらに「母性ホルモン」とよばれる「オキシトシン」ですが、これは男性からも出ています。父親が赤ちゃんを抱っこする

前と後で測ると、抱っこ後にオキシトシンが増えていることがわかっています。ですから男性も自信をもって、子育てをしてください。

赤ちゃんは、敏感であると同時に自律していて、敏感な能力でいろいろなところから情報を取り入れて育っていきます。だから放っておかれると困りますが、世話をする人が母親であっても父親であっても保育士であっても、ふつうの環境であれば、積極的に情報を取り入れる能力がある。そういう人たちです。

子育て支援は、「福祉」ではなく費用対効果が最も高い「投資」です

最後に、「企業にとって子育て支援はどのような価値があるか」について、興味深い研究結果をご紹介します。

アメリカのシカゴ大学教授のヘックマン氏、この方はノーベル経済学賞も受賞している方ですが、人生のなかでどの時期に投資するともっとも費用対効果があるかということを経済学的に研究しています。そこで明らかになったことは、もっとも費用対効果が高いのは乳幼児期への投資だということです。

子ども、とくに乳幼児期の子どもにいろいろな意味で手をかける。保育園や幼稚園を作ったり、保育環境を整えたり質の高い保育士を育てること。あるいは企業が子育て中の社員のためにさまざまな制度を作り支援すること。こうした施策は福祉としてとらえられることが多かったと思います。大事だけれど、費用対効果は望めない。

しかしヘックマン氏の研究結果によって、乳幼児期の施策は福祉ではなく、もっとも効率のよい投資であることが証明されました。もちろん今すぐに子どもが会社に入って利益を生むわけではありません。しかしこれだけの少子化時代に、よりよい人材を育てるといことは、日本社会全体の人事であるといってもよいと思います。

子育てとは、日本社会を担っていく人材を育てると同時に、将来マーケットになる人たちも育てている営みです。企業としても、そうした世代の社員を支え、子育てしやすい環境を作っていくことは、少しばかり時間がかかる「投資」だと考えていただければよいと思っています。

男女平等の国フィンランドの子育て、家族、仕事……

家族まるごと「ネウボラ」に支えられ、 社会に祝福されて子どもは生まれてきます

「お母さんにやさしい国」ランキングで常に1～2位を維持しているフィンランド。妊娠期からの切れ目ない子育て支援策「ネウボラ」は、近年日本でも注目を集め、内閣府がネウボラをモデルにした「子育て世代包括支援センター」を立ち上げ、各地で「日本版ネウボラ」の実践も始まっています。

フィンランドの子育て家庭にとってネウボラとはどういう存在なのか。フィンランドで3人の子どもを出産、現在日本で子育て中の、駐日フィンランド大使館報道・文化担当参事官ミッコ・コイヴマー氏と妻のエリサさんにお話をうかがいました。



ネウボラおばさんとともに 赤ちゃんを迎えられる心強さ

日本で3人目のお子さんの妊娠生活を送られたエリサさん。フィンランドと日本の妊娠期のサポートの違いをお聞きすると、「医療的なレベルや保健の質は、日本はとても素晴らしい。フィンランドでも出産を担当する医師は医療的な検査を行い、診察は5分程度で終わってしまうんですよ」との答えが返ってきました。「でも担当の保健師さん(ネウボラおばさん)とは定期的な面談があり、妊娠中の気持ち、食事や生活の様子、仕事のこと、赤ちゃんの父親との関係など、いろいろな話を聞いてくれます。どんなことでも相談できる人がいる。それが心強いですね」。

夫のミッコさんにとっても、ネウボラは非常に大切な場所だったといいます。「妻の体や心にどんなことが起きているのか、ネウボラのおかげで知ることができました。男性は妊娠によって体の変化はないし、妻より疲れていないし、不機嫌になったりもしません。だから赤ちゃんを迎えるイメージが具体的ではないですよ。ネウボラがなかったら、妊娠や出産を、別世界のこととしてとらえていたかもしれないです。でもネウボラのおかげで、私たちは共通の世界で生活しています。お互いに理解しようとしています。それがとても大切だと思います」。

会社では、女性が働くことも 子どもを産むことも当たり前

お母さんにやさしい国と評価されるのは、ネウボラのような子育て支援施設があることのほかに、女性が働きやすい社会であることも大きな理由です。

「子どもをもつことは、生活や人生のなかで当たり前のことです。もし妊娠や出産で会社の雰囲気が悪くなるようだったら、誰もその会社で働きたがらないですよ(エリサさん)。「フィンランドに比べると、日本は妊娠に対する雰囲気が違うかもしれません。日本の女性は妊娠すると‘申し訳ありません’といって会社に報告します。子どもが生まれるというのは、人生のなかで一番幸せなことなのに、そういうふうには言わなければいけないのは、残念なことだと思います」(ミッコさん)。

ミッコさんとエリサさんは、最初のお子さんが生まれたときに、同じ機関で働いていました。従業員同士の結婚で生まれた赤ちゃんが初めてだったので、出産祝いで会社から贈られたロンパースの胸には「100%この会社の遺伝子」と書かれていたそうです。

「フィンランドと日本の一番の違いはライフスタイルだと思います。労働時間も短いですし、家庭のなかでは男性にも役割があります。妻のお手伝いではなく、自分の役割をもって、家庭のことも子育てのこともやります。男性も女性も、ライフステージに合わせてキャリアを調整しながら働き続けることが当たり前。フィンランドの子育ては、こうした企業文化にも支えられていると思います」。

ミッコさんのことばに、日本がこれから目指すべき子育て支援の方向性が示されているように感じました。

「ネウボラ」

フィンランド語で「アドバイスする場所(ネウボ=アドバイス、ラ=場所)」という意味の子育て支援施設で、妊娠から出産、就学前までの子どもと家族を切れ目なくサポートする。地域ごとに設置されており、妊娠期からの家族をワンストップで支える窓口になっている。妊娠期から定期的に行われる面談では、毎回同じ担当保健師(ネウボラおばさん)が子どもの発育や発達、子育ての方法、夫婦関係などあらゆる相談に乗り、必要に応じて医療機関や専門機関との橋渡しや情報の共有を行う。

ダイバーシティ課題に日々取り組む皆さまへ。好評！ 異色のセミナー第2弾
8月26日(水) 14:00～ **梶田智奈美先生セミナー**

先着50名様／参加費・無料／会場・LEN貸し会議室「飯田橋」



のきた
梶田智奈美先生
臨床発達心理士・学校心理士

早稲田大学大学院人間科学研究科卒業。子どもの療育施設、総合病院小児科、親子支援施設にて、ことばや発達、親子支援等を行っている。また小学校にて巡回相談をおこない、学校生活におけるさまざまな問題について、アセスメントやコンサルテーションを通して、問題の解決や改善をサポートしている。

「妊娠・出産・復職」への対応を
生産性・企業力UPにつなげる法則とは？
～アサーション、アドラー理論など心理学視点の効用～
……これまで語られなかった人材マネジメント実践のコツ。
生涯発達を支えるパートナーとして、
教育現場や地域社会が深い信頼を寄せる梶田智奈美先生のセミナーです。

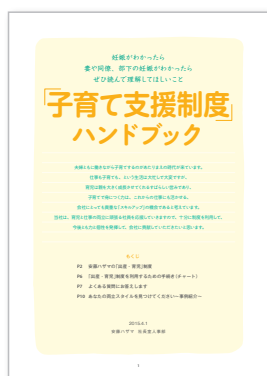
梶田智奈美先生のセミナー
多様な人間関係に効く、
「ともにUP」の法則と実践のコツ



お申し込みは、無料企業登録後、ログインしてセミナーコーナーよりお申込下さい。

ダイバーシティPressチームの制作物ご紹介

安藤ハザマ様 「子育て支援制度」ハンドブック



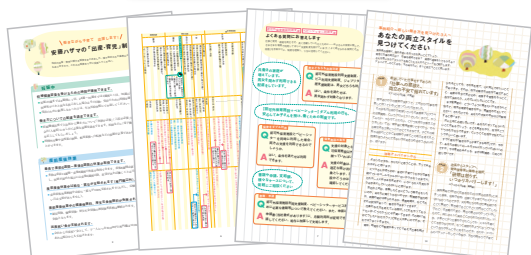
「子育て支援制度改正にあたって、制度の認知向上と運用のために制作物を検討したい」と、人事部様からのご依頼をうけて、ダイバーシティPressチームが参画、編集のお手伝いをした「『子育て支援制度』ハンドブック」全12ページが完成しました。ご担当様から寄せられたコメントをご紹介します。

ご担当
様
から
の
コ
メ
ン
ト

「こんな制度があるんです」と伝える、
思い通りのツールができました！

2015年4月に社員の両立支援を目的とした育児休業制度などの改訂を行いました。「利用できる風土づくりのためにも、制度をわかりやすく伝えたい！」そんな思いからハンドブック制作を思いました。ダイバーシティPressチームの方々にアドバイスをいただきながら校正を重ねた結果、思い通りのものができあがりしました。制度利用者への説明資料としてはもちろんのこと、利用者の方へも「こんな制度があるんです」と伝えるツールとしてどんどん活用していきたいと思っています。

社内からは、「制度が読みやすくてまとまっているうえ、事例紹介もあって参考になります」「色や文字など柔らかい印象で、建設会社という比較的堅い印象がありますが、とても親しみやすいハンドブックですね」と好評の声が届いています。



御社の支援ツールの企画・制作のお手伝いをします。どうぞご相談ください。

人事・労組・健保の皆さまと共に考える

ダイバーシティPress

<http://www.hataraku-ikuji.jp>